

医療法人 春秋会・社会福祉法人 五蘊会

四季

〈広報誌〉
Shiki

vol.12
秋号
2020.10



——長い間ご愛読ありがとうございました——
広報誌リニューアルを控え、最終号になります！

01 | 広報誌32年の歩みを振り返る

05 | 永田 剛相談役 特別寄稿『三度目の覚悟』

13

14

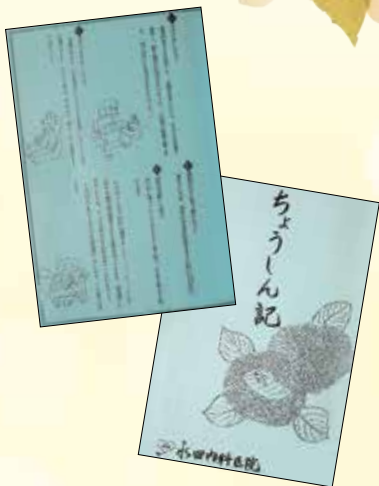
春秋会・五蘊会 理事長からのメッセージ
創業理念

広報誌32年の歩みを振り返る

広報誌のリニューアルを控え、春秋会・五蘊会の合同制作による『四季』は今回で最終号となりました。長らくのご愛顧に感謝して、これまでの広報誌の歴史を振り返る総集編をお届けします！

創刊号は「永田内科」
開院3年目に発刊！

初代広報誌は昭和63年3月の創刊。巻頭言としておなじみの「ちょうしん記」が誌名に題され、コピー用紙にワープロ打ちの小冊子として誕生しました。そもそも広報誌が制作されたのは、小さな診療所であった永田内科が忙しくなる中、「もう一歩でも患者様たちと近づくことができたら、どんなにか良いだろう」という思いがひとつになったから。手作り感あふれる誌面には、当時の永田 剛院長と若いスタッフたちの熱意と患者様に対する思いが詰まっています。



第2号の表紙。
誌面も愛情たっぷりです！



第3号からおなじみの装丁に。
連載「ドクトル・ドーネ氏の胃学豆知識」では、医学情報がわかりやすく伝えられています。

～創刊によせて（抜粋）～

これまで病気を通して多くの人々に接して参りましたが、医学的な武器だけで病気と戦えるわけではありません。人事を尽くし切った後に残るのは、「相互の信頼感」という薬のみのようです。日常の診療の中では、言葉を尽くしてお話できないのが残念です。せめてそれを補う為に、そして少しでも触れ合いを深める為に、院内誌『ちょうしん記』を創刊致しました。

——院長 永田 剛



初期編集長に聞きました！ 松尾 幸さん



編集委員時代の松尾さんと、
とっても若い永田 剛相談役。
松尾さんは創刊時からのべ
10年間、中心メンバーとして
参加されました。

▼毎号、どんな気持ちで制作していましたか？

楽しみに待っていて下さる患者様の期待に応えられるように、年に二回でも発行する事が大切だと認識しながら頑張っていました。

▼特技や趣味が誌面作りに生かされたことはありますか？

絵を描くことが好きでしたので、挿絵にしたり表紙に使って頂いたり。楽しみながらやっていました。

▼思い出に残っている企画はありますか？

喘息の患者様に討論方式で行った

取材です。喘息の患者様にはそれぞれタイプがあり、中にはご自分が喘息と勘違いされている方もいらっしゃいました。そうしながら、少しずつ患者様と触れ合う事ができたように思います。

▼うれしい反響や、印象的な感想などはありますか？

ちょうしん記を集めていらつしやる患者様がいました。その方は創刊号から欲しいと希望されたのですが、当時は残っているものがありません。けれど、その方の熱い思いに私はコピーしてさしあげることにしました。すると満面の笑みで帰られました。こんなにちょうしん記を愛して下さる方がいるのだと思うと同時に、ずっと患者様に寄り添っていただける広報紙であると心から感じた瞬間でした。



イラストが得意な松尾さんによる人気連載「たけし君の診療日記」。
シャツを開けた女性の絵は、何人もの方から「モデルは私やろ?」と言われたそう☆

ちょうしん記年表

昭和63年3月	創刊号	発行
平成元年5月	第2号	発行
平成2年2月	第3号	発行
平成2年9月	第4号	発行
平成2年11月	特別号	発行
平成3年6月	第5号	発行
平成4年7月	第6号	発行
平成5年4月	第7号	発行
平成6年6月	第8号	発行
平成7年4月	第9号	発行
平成7年11月	第10号	発行
平成8年5月	第11号	発行
平成8年12月	第12号	発行
平成9年12月	第13号	発行
平成10年9月	第14号	発行
平成11年1月	第15号	発行
平成11年5月	第16号	発行
平成11年8月	第17号	発行
平成12年11月	創立10周年記念号	発行
平成13年4月	第18号	発行
平成13年8月	第19号	発行
平成13年12月	第20号	発行
平成14年4月	第21号	発行
平成14年10月	第22号	発行
平成15年7月	第23号	発行
平成16年4月	第24号	発行
平成16年9月	第25号	発行
平成17年1月	第26号	発行
平成17年8月	第27号	発行
平成17年11月	創立15周年記念号	発行
平成18年1月	第28号	発行
平成18年6月	新施設特集号	発行
平成18年7月	第29号	発行
平成18年11月	第30号	発行
平成19年8月	第31号	発行
平成20年2月	第32号	発行
平成20年8月	第33号	発行
平成21年1月	第34号	発行



創刊号の表紙はなく、「創刊によせて」から始まっています。



平成2年11月に南長崎クリニックが開院しました！



南クリ5周年記念号。表紙に創業理念が書かれています。



創立15周年記念号には、患者様やデイケア利用者様のコメントも多く掲載されました。

14号から編集メンバーが入れ変わり、新しいスタイルの「ちょうしん記」が誕生。最新の医学情報やすぐに実践できる行動療法などが紹介され、さらに介護保険開始に向けて「シリーズ『介護保険』もスタート！創立10周年を迎えた南クリにふさわしい、充実した誌面が繰り広げられました。



この装丁を覚えている方は「ちょうしん記」通です！！



内容もギッチリで読み応え抜群です。

編集メンバーが新しい誌面を模索する中、一度初心に立ち返ろうという気持ちを込めて23号から以前の装丁が再登場。28号からはスタッフによる企画「突撃インタビュー」が開始され、さらにちょうしん記最長連載となる「南クリ子さんの先生に聞いてみよう」もスタート！患者様や利用者様のコメントも紹介され、皆様に寄り添う広報誌のスタイルが確立されました。



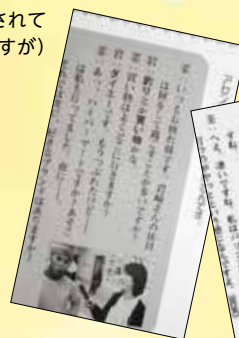
ソフトボール部の奮闘ぶりも紹介されています。貴重な勝ち報告も(時々ですが)見られますよ！



23号の表紙。この頃から巻頭言が2ページになり、より語りかけのような文章が綴られています。



ちょうしん記名物「南クリ子さん〜」の執筆担当は難波先生。第1回目の題材はメタボリックシンドロームでした。



「突撃インタビュー」では、スタッフが被り物をして登場！回答者は初回抽選で選ばれ、その次からは回答者の紹介制となりました。

14号からリニューアルし専門誌顔負けの内容に！

初心に戻り、以前のバージョンで再出発

五蘊会が発足し、 医療と福祉両輪の誌面に

平成21年4月より社会福祉法人五蘊会による特別養護老人ホーム 琴の浦荘の運営が正式に開始され、誌面に五蘊会の記事が登場します。同じ頃、春秋会では「南長崎クリニック劇団」が発足し、誌面も大充実の華やかな時代に！ 一方で「御利用者様への満足度調査」や「健康クイズ」、職員によるダイエット企画など、読者に寄り添った企画も数多く登場。永田相談役からは『目指せ百歳イキイキ人生』の言葉が度々掲げられています。

ちょうしん記年表

平成21年8月 第35号 発行
平成22年1月 第36号 発行
平成22年4月 第37号 発行
平成22年8月 第38号 発行
平成23年1月 第39号 発行



南クリ創立20周年記念号。巻頭言では「聴診器」というタイトルで、永田相談役の聴診器に対する思いが書かれています。

平成23年7月 第40号 発行
平成23年9月 第41号 発行
平成24年1月 第42号 発行
平成24年4月 第43号 発行
平成24年7月 第44号 発行
平成24年10月 第45号 発行
平成25年1月 第46号 発行
平成25年4月 第47号 発行
平成25年7月 第48号 発行
平成25年10月 第49号 発行
平成26年1月 第50号 発行
平成26年4月 第51号 発行
平成26年10月 第52号 発行
平成27年4月 第53号 発行
平成27年10月 第54号 発行



平成28年4月 第55号 発行
平成28年10月 第56号 発行
平成29年4月 第57号 発行
平成29年7月 第58号 発行



36号に掲載された満足度調査では、利用者様とご家族、合計約300名にアンケートを実施しました。



南クリ劇団による「銭形平次」の記事。掲載された35号は合計38ページの大長編となりました！

職員によるダイエット企画のトップバッターは神山部長！
その後も続々と職員がチャレンジしては苦笑いの結果に…☆

「聴診器」～第39号巻頭言より（抜粋）～

聴診器 それは私たちのシンボル 武士の魂
～中略～

私と病人の心を繋ぐ 聴心器。
新しい異常を告げる 聴新器。
不安な気持ちを和らげる 聴信器。
生命の神秘を教えてくれる 聴真器。

ゆっくりした時間の中で、雑音に悩まされることなくじっくりと聴診をしてみたい。
考えを組み立てながら、身体の中から発せられるメッセージに耳を傾けたい。
今年はそういう時間を持とう。



2号分のみ新しい装丁で作られた「季報ちょうしん記」を経て、58号で一旦の幕を閉じます。



中期編集長に 聞きました！

福田 真司さん



新卒で春秋会に入社し、早くも15年目。平成25年から約6年間、編集メンバーとして活躍しました。

▼編集作業はどんな時間を使って行いましたか？

「生活のすべてが編集作業でした。普段の生活や仕事から情報を集め、今まで読んだことがなかった本を手に取り、積極的に他施設に関わって行きました」

▼編集長時代の思い出を教えてください。

「大腸CTを体験して紙面作りに協力したり、NBCラジオに参加したりと、色々な体験をさせていただきました。また、永田相談役の巻頭言には毎回時間的な余裕を持つて原稿依頼を行うのですが、発刊時にタイムリーな内容になっていることにいつも驚かされました」

▼うれしい反響をもらったことはありますか？

『いつも楽しみにしています』『福田君、頑張ってるね』とお声掛け頂き、とても励みになっていました。本当にありがとうございます！」



合計12冊の『四季』をお届けしました！

バックナンバーは春秋会・五蘊会の各ホームページでご覧いただけます。特集はもちろん、巻頭言もすべて掲載していますよ♪

「一法人の力を
合わせた
『四季』が誕生！」

「ちようしん記」が華麗に変身し、春秋会・五蘊会の合同制作による『四季』が創刊。親しみのある誌名は巻頭言のタイトルとして使用され、毎回多くの反響を呼ぶ記事が掲載されました。特集は医療・介護・保育の枠に留まらず、地域の施設やイベントなども積極的に取材。「地域社会の輝きに貢献していきたい」という両法人の想いがページごとに込められています。



現編集長に
聞きました！



五蘊会 編集長
宮崎康平

通所介護事業所 琴の浦荘所属。「四季」立ち上げ時から編集メンバーに加わり、vol.03より五蘊会の編集長に就任。



春秋会 編集長
立石大輔

南長崎クリニック 居宅介護支援事業所所属。平成23年から編集に関わり出し、「四季」vol.04より春秋会の編集長に就任。

▼二法人合同での誌面作りはいかがでしたか？

立石「普段会えない職員とのつながりが持てましたし、何より記事の幅が広がったことが良かったです。しかし、各拠点間の距離がありますので、会議で集まる時の調整は大変でしたね」

▼思い出に残っている企画を教えてください

宮崎「vol.05・08に掲載されている『地域のかげやき』です。最初は（勤務地である）琴海地区の魅力を発信したいと思って企画を提案したのですが、その後

も各拠点から話題が出てくる出てくる（笑）。話している職員の表情も輝いていました。今後とも機会があれば、各拠点地区のかがやきを紹介していきたいです」

立石「vol.01で長崎市の山口政策監（現長崎市福祉部長）にインタビューしたことです。素晴らしい内容で、それをあと千字削らなきゃ、あと五百字…と、とても悩みました（笑）」

▼相談役とのやり取りで印象的なことはありますか？

立石「四季の編集長をやってほしいと言われた時のことです。法人の顔にもなる広報紙の責任者をさせていただけるとを、とてもうれしく思いました。正直なところ、突然呼ばれ『何かやらかしたかな』とかなり緊張して理事長室に入った記憶も鮮明ですが…」

宮崎「初めて企画会議を行った際、『記事の題材に関して多角的・多面的に見る必要がある』との言葉をいただいたことです。それまでは自分が関わってきた介護分野に視点が偏りがちでしたが、そのような見方をする中で記事の可能性や面白さが広がることを知りました。これは普段の仕事にも活

かされていると思います。それから、巻頭言の初校原稿を拝見できるのは、毎回とてもうれしいことでした」

▼最後に熱いメッセージをお願いします！

立石「前身、ちようしん記のころから編集に関わらせていただき、もう8年以上になるのかと驚いています。編集に関わったことで自身成長できたと感じていますし、面白い体験もさせていただきました。何より、一緒に頑張った宮崎編集長、福田前編集長をはじめ広報委員会のメンバーとは楽しく活動させていただきました。本当にありがとうございました。またみんなで飲むぞー!!」

宮崎「春・夏・秋・冬。『四季』にはそれぞれ特色があり、自分の魅力を最大限に発揮した後、次の季節へ移り変わっていきます。そんな季節のように、広報紙『四季』も次の季節に向けて移り変わりを始めます。この広報紙に学んだ経験を活かし、また意志を継ぎ、新しい広報紙を作っていきたいと思っています。これまで本当にありがとうございました。『四季』に関わられたすべての人に感謝です！」

——「愛読、誠にありがとうございました」——



相談役 特別寄稿

三度目の覚悟

永田 剛

はじめに



健康上の理由で、昨年九月を最後に診療から身を引いていきます。中途半端な無念の退場です。これまで、きちんとした経緯の説明ができず、皆様には色々のご心配をおかけしました。あれから一年が経過し、二つの法人の継承も無事終えました。そろそろ真実をお話しできる時期と判断しペンを執ることに致しました。

一人の医師の悪戦苦闘の物語をご一読下さい。

「照千一隅」



照千一隅、世の中の片隅を守ることに、結果的に千里を照らす、の意味。天台宗の開祖最澄が紹介した中国の故事に由

来する仏法説話。

私は、一人の医師として、日々の仕事は診察室の中ではあっても、その積み重ねが一人の患者さんとそのご家族の幸福に繋がり、やがては地域の人々の健康維持にも貢献できる、と確信して医療活動が続けてきた。

―人生最期の日まで聴診器を握り続ける！

そのような思いは、どのようにして芽生えたのであろうか。

私の青年期は昭和の大学紛争の時代とどつぱり重なる。この時期を通した多くの人々との語らいが、本来の気質と同調し、人格形成を増幅させ、気が付いてみると、「責任」という言葉にとっても敏感な個性が仕上がっていた。

責任を感じる、責任を果たす、責任に殉じる、責任をと

る。どれ一つをとっても重い言葉である。更に内科医という言葉に冠詞としてこの上に重ねると、更に重みを増す。

責任と聴診器。聴診器は内科医にとっては単なる診察道具ではなく、職務上のシンボルであり、責任という概念を具象化したスピリットでもあった。

「最期まで聴診器を握り続ける」とは、最期まで責任を果たしますという決意表明であったのだ。

内科医としての責任

それは、求めに応じて何時でも診察する責任、診療の結果派生する諸事態に対応する責任、患者の心に寄り添う責任、患者家族に対する責任等々。

職務上、常に付きまとう責任。その重圧が、内科医という

職業に一層の深みを与えて行く。

更に経験を積むと、個々の患者や家族に対する直接的責任とは別にもう一つの責任の存在に気付かされる。それが社会的責任である。

法人の創業の理念の中にそのあたりのスピリッツが謳われている。

曰く、

「……常により人間的に、より科学的に対応することに徹し、社会に信頼され、絶えず成長し続ける法人を目指します。

……」

医師と患者との関わり合いの中心に人間的対応を置き、更に社会的役割にまで昇華させて行くという願いと決意を示したものである。

一連の地道な活動は多くの患者・利用者の支持に繋がり、法人は大きく成長を遂げた。そし

て、更に増大した責任と義務に応えるべく、果てしない消耗戦が続く。しかし、気力・体力が充実した時期には限りがあった。

健康神話の崩壊

医師は、心身共に健康で充実していることが診療の大前提となる。知的優位性と精神的余裕が的確な診断・治療と患者への優しさを生みだすエネルギー源となる。更に、それを継続するには体力と気力の下支えが不可欠となる。どこかに弱点を持つと、責任の遂行と長期間にわたる継続医療の達成は困難となる。

平成二十九年は、古希を越えたばかりの私には思いもかけない厄歳となった。

同年九月、膀胱癌にて膀胱全

摘術及び代用膀胱（膀胱ストーマ）造設術を受ける。大手術となった。一般的な癌の病期分類ではステージⅠ期。

―一命は取り留めたようだな。合併症による紆余曲折はあったものの、同年十一月には仕事へ完全復帰。

そして一年が経過した。その間、何事も無かったかのように仕事に明け暮れていた。体調も良かった。癌は克服できたと思っていた。

そうした中で、経過観察のためのCT検査が実施された。

驚いたことに、そこで明らかにされたのは癌の再発と多数のリンパ節転移。思いもかけない結果である。知らぬ間に一気に病状は進み、ステージⅢ期に至っていたのだ。

―勝負あり、ダナ。この所見では助からないな！

これが、一回目の死への覚悟の瞬間であった。

―まだ時間はある。まずは、歩みの速度を落とさなくては

―そして、背負った重荷を少しずつ下ろすのだ！

二週間程度の抗癌剤導入のため入院の後に仕事に再復帰。治療は三週毎に外来化学療法室にて実施となった。復帰に当たって、幹部職員に今後の大まかな方針を伝えた。医師としての責任と経営者としての責任の撤退・移行作戦である。健康不安を抱える医師には、患者の生命と運命を預かる仕事はできない。

少しずつ診療時間が短縮され、主治医の交代が進められた。『責任と義務』と言う重い荷物が徐々に下ろされ始めた時でもあった。

合併症との闘い



選択された抗癌剤の効果は極めて良好で、三か月後にはリン

パ節転移の著名縮小効果が表れ、改善への手ごたえを掴みかけていた。しかし、何事もそう上手くは運ばない。この頃から副作用と合併症の問題が重く圧しかかってくる。治療を続ける度に副作用は悪化する。リンパ節転移は明らかに縮小しているのに、副作用のために治療を断念せねばならない。

―何事も上手く行かないなあ！
ここを境に、入退院の繰り返し
の時期を迎えることになる。
体力の消耗を招き、瀕死の瀬戸際まで追い込まれることになる
一連のドラマの序章でもあった。

令和元年九月十四日、病状急

変にて危篤状態となり大学病院へ救急入院。病名は腸閉塞による敗血症性ショック。これが解決され一般病室へ戻されて間もなく、

十月三日、大腸出血による失血性ショックの合併にて緊急手術。大量輸血も加わり、ようやく一命を取り留める。

―ついていない時は、運の悪いことが重なるナ！

―今度、同じようなことが起こると助からない！ 今のうちに遺言書を作っておこう。

十月六日、テレビではラグビーワールドカップでの日本代表の躍進ぶりが熱く伝えられていたが、私の病状は再び急変し、危篤状態に陥った。今回は小腸出血による出血性ショック。深夜帯での二回目の緊急手術。薄れゆく意識の中、耳元で呼びかける妻と次女の声が遠くの方で聞こえた。

―今度はもうダメか！
そのまま意識が落ちていった。二度目の覚悟の瞬間である。

気が付くと、すっかり馴染みとなった集中治療室で林立する点滴ビンに囲まれていた。

―命のドアはまだ開いていたようだ！

一命は取り留めたものの、私は大腸ストーマから小腸ストーマ状態となり、膀胱ストーマと合わせてダブルストーマとなっていました。

十一月十二日退院。体重十五kg減、要介護度五度、身障者二級相当、長距離移動は車椅子状態。この時点で医師仕事への復帰は断念せざるを得なかった。
病状が癒えたら又いつもの様に診察を、と願っている多数の患者さんがいる。

しかし、それに応えられない悲しい現実が待ち構えていた。

責任と義務を果たせなくなった医師は退場せざるをえない。どうやって、それを伝えて行くのか？

退院した後の経過も思わしくなかった。二度の緊急手術による後遺症が腸管機能に表れていた。慢性的脱水と栄養障害に苦しめられ、減少していた体重もいっこうに増える兆しはなかった。毎日の点滴治療も焼け石に水の有様だった。それでも、週二〜三日程度は短時間の出勤をこなしていた。最後の責任、経営責任を果たそうとの思いからである。

診察室



令和二年四月一日、大学病院の定期受診日。これまで、二週間毎に血液検査と診察があり、きめ細かいフォローアップを受

けていたと言える。

四月は国公立病院の人事異動の時期であり、私の担当医も交代する予定だった。引継ぎにて、私が先輩内科医であることは既に把握されている。一通りの挨拶、最近の体調の問診が済み、机上の電子カルテの画面に視線が移った。そこには、今朝の検査結果が表示され、更に古いデータと新しいデータとが示されている。新しい担当医が、眩くように口を開いた。

「肝機能がチョット気になりますね。大した数値ではありませんが、二週前より少し増えています。何か意味がありそうですね……」

確かに、肝機能の数値が軽度の異常を示している。担当医は言葉を続ける。

「時間がよろしければ、これから腹部エコーをしましょう」

これまでも、肝機能異常は

度々出現していた。数値的にはもっと強い異常を示したこともあったが、それなりの理由があり自然経過で改善していた。今年一月のCT検査でも特に肝臓の異常の指摘はなく、今回もそれ程気にしてはいなかった。

午後一時近くの大学病院は、午前中の外来の喧騒から落ち着きを取り戻し、エコー検査室の待合いもまばらだった。直ぐに

検査が始まり、肝臓を中心に検査が進められて行く。検査開始から少し時間が経過したので、押し黙ったまま検査を進める技師の方に声をかけてみた。

「何か所見がありますか？」

「担当医の方から説明があります。そちらで聞いて下さい」

と乾いた返事。少し不吉な予感を覚えながらエコー検査室を後にした。



三度目の覚悟



内科の待合室も落ち着きを取り戻していたが、まだ数名の診察待ちの方が残っていた。しばらくして、担当医に促され診察室で対座した。医師は電子カルテを呼び出し、エコー検査の画像を表示している。

多数の画像が撮影されている。最初の数コマは流すように観察されていたが、次第に送りが緩やかになり、一枚一枚の画像がハッキリと読み取れるようになって来た。エコー画像は、私も仕事柄見慣れている。そして、静止固定された一枚の画像に、私の思考回路が釘付けされた。

画面一杯に肝臓の中心部断面が描出され、その中に肝臓の異常所見がクッキリと表れている。大きなもので小指の頭程度

の大小の結節が、多数ばらまかれた状態で写し出されている。結節とはやや硬めのシコリのことであり、癌の存在を意味することが多い。

その時の私の思考回路は医師としての回路に切り替わっていて、患者としての私を付度してはいなかった。これは、どうしようもない悲しい習性である。与えられた所見から、最も考えられる診断、他の可能性としての鑑別診断、次にやるべき検査、予想される治療法の選択等が順序を追って流れ作業の如く頭の中に打ち出されて来る。そして、当然、その回路の先には、予後に関する見通しも含まれてくる。

私はそう遠くない死期を直観した。
—この所見では、生き延びるのは無理だ！

三度目の死の覚悟の瞬間であ

る。

担当医は、無表情に押し黙ったまま画面のコマを送っている。思いがけない所見を前に言葉を出しかねているのだろう。重い沈黙を破るように、先ず私が口を開いた。

「（肝臓の）マルチメタですね（多発性転移の意味）」

「そうですね……、肝生検がいりますね……、その前に造影CTですね」

更にたたみかけるように、「肝生検は入院が必要なので直ぐに手配しましょう。先ず、空きベッドを探さなくては。胃カメラ、大腸ファイバーも必要ですね」

担当医の機敏な判断で、瞬間に一週間の検査入院がお膳立てされた。このスピーディな対応に感謝しつつ、私は状況に身を委ねるしかなかった。

—ここまで来ていたのか……、

あと、一〜三か月……

医師の予後予測には、あまり科学的根拠はない。とは言っても、癌の場合、大外れに外れることもない。更に、医師の性格も影響してくる。楽観論と悲観論。私の場合はどちらだろう等等と考えながら時間が過ぎていく。

私の後方に妻がいる。看護師であった彼女には「メタ」の意味は十分理解できている筈である。この異様に張り詰めた雰囲気の中で、本人から発せられたこの言葉を彼女はどう受け止めただろうか。彼女の胸中まで思いやる余裕は、その時の私にはなかった。

一通りのお礼を述べ、診察室を後にして、待合室の椅子に力無く腰を下ろした。少し遅れて妻が腰を下ろす。しばらくの間、無言、無表情、深いため息。

受付で明日以降のスケジュール

ルについての説明があり帰路についた。帰りのタクシーの中で、彼女が重い口を開いた。

「どうも、おかしいと思ったもん。三月に入って、食欲は無いし、ムカムカしたり、もどしたりしていたもの……、やっぱり、どうかあったのね……」

車中での言葉数は少なかった。

「帰って、お昼にしましょう。」

おいしそうなサンドウィッチを買って来たから」

と重い空気を払うかのように何時もの口調で話しかけて来た。

どちらにしても、検査が進まない又何事も始まらない。私の頭の中には、あのエコーの画像が住み着いて離れなかった。

再び抗癌剤



新型コロナ騒動での緊急事態

宣言の為に病室への見舞いは原則的に禁止されていて、病棟フロアは閑散としていた。

検査結果はやはり膀胱癌の多発性肝転移。ステージ分類で第4期。ギリギリのステージである。これまでに二種類の抗癌剤治療を受けていて、いずれも副作用の為に継続使用を断念していた。一般的にはもう使える抗癌剤は無い。このままでは一気に末期癌に陥ってしまう。

結果説明と今後の方針決定の為の面談がセットされた。最後の治療に入る前の重要な面談である。出席者は担当医二名、看護師、私と妻。やり取りは、専ら主治医と私の間で交わされていて、妻には詳細は伝わらなかったようだったが、その辺り

を思いやる余裕はやはりなかった。

治療方針としては、有効性は不明であるが、理論的に期待できる化学療法に賭けてみることにになった。教科書に無いやり方である。治療の為にそのまま入院継続が決められた。

治療としても最終章に入っていく。とても勝ち目のある戦さとは言い難い。

この時点で私は二つの法人の理事長職を辞することを決意した。最後の重荷を下ろすことにしたのだ。

次の週から早速化学療法が開始された。三種類の抗癌剤を組み合わせて、二日間の点滴にて投与する方法である。既に腹部内臓癌に対しての効果は確立されていたが、私のようなケースへの投与は前例がなかった。

初回治療の反応は想像を超えていた。点滴終了後の三日目か

ら五日目に強い副作用に苦しめられた。強い胸痛、倦怠感、食欲不振、悪心、発熱、血圧上昇、頻脈等々、想像を絶する副作用だった。

―でも、この抗癌剤治療にけるしかない

―この痛みは癌細胞の断末魔かも知れない。都合の良い方に解釈して耐えるしかない！

一連の入院の中で、これまでに抜け落ちていた大切なことに気付かされた。それは、家族への配慮である。これまでの主治医からの病状説明は、私への説明であり、直ぐに医師対医師の話になってしまつて、家族は立ち入れなかった。家族は、より客観的な視点から私の病状を知りたがっているのである。その場をセットしなくては。

間もなく妻と娘への病状説明の機会が持たれた。

説明が終わって、一旦病室に戻って来たが、言葉はなかった。あえて私の方から聞くこともなかった。やっと患者家族に對する責任の一部が果たされた時でもあった。私の心の中も少しずつ落ち着きを取り戻していた。

後日談として、相当厳しい内容であったようだ。特に予後に關しては、かなり悲觀的な見通しが語られていた。

二週間に一回の化学療法が開始され六回が終了した。副作用は回数を重ねても慣れることはない。

果たして、効いているのだろうか？

小さな奇跡



六回目の抗癌剤治療が終了した。四月に開始してから三か月が経過していた。

定期的にチェックされている腫瘍マーカーは、回を追うごとにドラマチックな改善を示している。食欲も少しずつ回復し、体重も五、六キロの増加を示している。自覺的には、抗癌剤が奏功して、癌が少し小さくなった気分だ。

七月十五日、経過觀察の為のCT検査が実施された。画像を一見するだけで肝臓の中の転移巣が縮小しているのが見て取れる。期待を上回る嬉しい結果だ。

「今のところ上手く行っていますね。腫瘍マーカーの結果と一致していますね」と何時もの冷静な表情の主治医。

「ここまで縮小しているとは！奇跡的ですね！」と私。

とは言ってもまだ癌は残っている。縮小しているとは言え、まだ癌が残っている以上、治療としては道半ばである。

効果が期待できる現在の治療をそのまま継続したいものであるが、副作用の問題が立ちはだかる。副作用に耐えきれるか？血液データも、厳しさをましている。

癌の縮小は、その分だけ寿命が延びたことを意味する。そのことが私の心を少し明るくしてくれた。

やり残したことがまだある。その時間が与えられたのだ。

妻の献身的看病には頭が下がる。

大阪在住の長女はコロナ禍の移動制限でなかなか帰郷できないでいるが、それを補うように

メールを送ってくれる。文面から私の症状に一喜一憂しているのが分かる。

近所に住む次女家族がよく見舞ってくれる。

先日は、来春入学予定の孫娘のランドセルの買い物がたがた食事に出かけた。私は大盛りの天ざるをペロリとたいらげた。暫く前までは油ものは鼻先で辟易していたが、最近は食べ物の味わいが戻って来ている。来週は家族の記念撮影かたがた食事の予定が既に組まれている。二人の孫娘に「ジージ」の出演がシッカリ用意されている。

限られた時間をいとおしむように、何かと私との思い出を作ろうとしている。

長い記憶の最終章を、楽しい思い出でんこ盛りになろうとしているのだろう。

あとがき



私の癌騒動のさなか、四月二日、母が永眠した。享年九十三歳。脊柱は若い頃の労働仕事で変形屈曲し、この数年は車椅子生活を余儀なくされていた。昭和・平成を生き抜いてきた内臓機能も限界に達し、これ以上の生命維持は困難であった。身体の持てるすべてを使い尽くし、老衰状態に陥っていた。更に、衰弱の進行と共に、比較的保たれていた認知機能も急速に衰え、多くの記憶が曖昧となり、何かにこだわることもなく、生と死の区別もおぼつかないまま最期を迎えた。

これまでの長い臨床経験から、自分自身にとつての望ましい最期の形なるものが、胸の奥深くで漠然とイメージされていた。

た。全てのヒトが必ず通過する「死」と言う瞬間。現在の「多死社会」の中で多様化された死の形。その中の安らかさとは？

人生を堪能するのに十分な寿命と、「死」を意識しないですむ程度の認知障害。時間と記憶。しかし、この二つを思いのままに掌握することはできない。

どんなに徳を積み、善行を重ねたとしても自分自身の「死に方」を選択指定することはできない。しかし、母はこの条件下で私がイメージした最も幸運な最期を迎えたのである。

一方、死線を一先ず脱し、執行猶予状態となった私。私には、母のような僥倖は望めない。いずれ訪れる末期癌状態に備えて、自分らしい人生を最期まで生き抜いて行きたいと願っている。



相談役近影。
ランドセルの買い物に行った時の様子。
6歳と3歳の孫娘とのひと時も楽しみのひとつである。



～広報活動リニューアルによせて～

「四季」最終号発刊にあたり、両法人理事長からのメッセージをお届けします。

永田 剛先生、長い間本当にお疲れ様でした。

創業以来発行してきた広報誌は「ちょうしん記」58号、「四季」12号。文才豊かな先生だからこそ積み重ねてこられた充実した内容であり、これまで営んできた医療・福祉事業の高みを維持しようと努めてこられた証でもあります。改めて伯父である永田 剛先生が駆け抜けた30年間の功績に敬意を表します。

私は幼い頃から母の勤務先でもある南長崎クリニックに病気の時も含めて訪れる機会が多数ありました。父を癌で亡くし、その父の遺言（実際に遺言の事を知ったのはかなり後になってからであり、私の名前の由来は「救済」です）により母とともに医学の道を目指していく中で、永田 剛先生の存在は真っ暗な大海原の灯台のようでした。

私が卒業した福岡大学医学部では、5年生の時に1年間かけてすべての科を回る臨床実習があります。その中で医師として一人一人の患者にどのように接したらよいのかと考えていた時に、永田 剛先生の診察室で実際の診察風景を見学させて頂いたことがあります。まさに頭の前からつま先までしっかりと診察し、患者様と心を通じて治療にあたる姿は、理想の医師像の一つとして今も胸に刻まれています。

医療法人春秋会の新理事長を託された今、永田 剛先生の存在があったからこそ今の私があるのだと改めて実感しています。

私は当法人の創業理念を継承・昇華し、これからの急激な社会情勢の変化にも柔軟な対応をとりつつ情報発信を行い、患者様や地域の皆様に対して法人一丸となって地域貢献を果たしていきたいと思いをします。



医療法人社団春秋会
理事長 永田 済

医療法人 春秋会と社会福祉法人 五蘊会、2つの法人の共同作業としての広報誌「四季」がこの令和2年度秋号をもって終了することになりました。2つの法人の創業者である永田 剛前理事長が長年に渡り、並々ならぬこだわりを持って続けてこられた企画ですので、大変残念に思います。

特に、前理事長が永田内科時代から執筆してこられた巻頭言がお手元に届くのを、毎回楽しみに待っておられた方々も多いのではないのでしょうか？ 時に難しいテーマを扱いながらも、まるで診察室で患者様の手を取りながら語りかけているかのような温かみのある文章で、それが人気の秘訣であったかと推察します。目の前に利用者の方々がいるかのように語りかけるというその想いを、今後の広報活動に引き継いでいきたいと思いをします。

さて、今後の五蘊会における広報活動ですが、私たちの活動内容やそこに携わる職員たちの想い、制度に関する説明などに加えて、福祉の分野における新たな取り組みなど、幅広いテーマを扱っていきたいと考えております。また、広報の媒体としてはホームページに加え、SNS（Facebook及びInstagram）、広報誌という3種類をフルに活用して展開していきますので、ぜひご期待ください！



社会福祉法人五蘊会
理事長 車 知也

両法人とも新しい広報活動に向けて準備中です。
また新しい形で皆様にお会いできる日を楽しみにしています！
春秋会ホームページ、五蘊会ホームページとSNSも
引き続きよろしくお願いいたします。



春秋会HP



五蘊会HP



五蘊会Facebook



五蘊会Instagram



医療法人社団 春秋会 創業理念

当法人は、医療及び介護事業を主体とし、それに関連する分野において常により人間的に、より科学的に対応することに徹し、社会に信頼され、絶えず成長し続ける法人を目指します。その実現のために以下の理念を掲げます。

【第一条】本物のやさしさを

全ての人の生命、人間性、自主性そして個性を尊重し、安心しておくれる継続療養の実現を目指します。

【第二条】仕事の質にこだわりを

他者の批判に耐えられ、客観的で妥当性のある仕事を目指し、自らの職務の質的向上に努めます。

【第三条】法律・道徳を守り、自らが理解されるように

職務倫理（プライバシーの保護と守秘義務、強要の禁止、その他）を遵守し、職務内容の説明に努め、理解・同意を求めます。

【第四条】自分の成長のため

自らの職務の社会的意義及び医療・福祉分野での位置づけを自覚し、職務の中での自己実現を目指します。

【第五条】本当のチームワークを

各自、我がままと捨て、仲間への思いやりを持ち、良好な職場環境の形成に努めます。



社会福祉法人五蘊会 創業理念

社会福祉法人五蘊会は、介護事業及び保育事業を主体とし、それに関連する分野において、常により人間的に、より科学的に対応することに徹し、社会に信頼され、絶えず成長し続ける社会福祉法人を目指します。その実現のために以下の理念を掲げます。

【第一条】本物のやさしさを

全ての人の生命、人間性、自主性そして個性を尊重し、その利用者が満足する自立した生活の実現を目指します。

【第二条】仕事の質にこだわりを

他者の批判に耐えられ、客観的で妥当性のある仕事を目指し、自らの職務の質的向上に努めます。

【第三条】法律・道徳を守り、自らが理解されるように

職務倫理（プライバシー保護と守秘義務、強要の禁止、その他）を遵守し、職務内容の説明に努め、理解・同意を求めます。

【第四条】自分の成長のために

自らの職務の社会的意義及び福祉分野での位置づけを自覚し、職務の中での自己実現を目指します。

【第五条】本当のチームワークを

各自、我がままと捨て、仲間への思いやりを持ち、良好な職場環境の形成に努めます。

春秋会・五蘊会拠点マップ



医療法人 春秋会

本部／南長崎クリニック
〒850-0921 長崎市松が枝町3番20号
TEL.095-827-3606
<http://www.syunjyu-kai.or.jp/>



社会福祉法人 五蘊会

本部／特別養護老人ホーム 琴の浦荘
〒851-3103 長崎市琴海戸根町743番地47
TEL.095-884-3510
<http://www.gouunkai.or.jp/>

